



# 地域なんでも情報局

第17号

平成26年12月9日発行

長崎市社会福祉協議会  
長崎市上町1番33号

TEL: 828-1281

## 福祉のまちづくり やってみゆ〜で・わがまち座談会

みなさん、『やってみゆ〜で・わがまち座談会』(以下、「座談会」という。)をご存知ですか? 「もう、私の地域では座談会をやったよ!」という方もいれば、「座談会って、何?」という方もいるかもしれません。では、座談会って何をする場かというところから「地域に困りごとはないか」「もし困りごとがあるなら地域で解決する方法はないか」「私たちのまちがどんなまちになればいいか」などを、その地域に住んでいる人たちが集まって話し合う場、それが『やってみゆ〜で・わがまち座談会』です。この座談会は、もともと平成23年に長崎市と長崎市社会福祉協議会が一緒になって策定した「長崎市地域福祉計画・地域福祉活動計画」(以下、「計画」という。)を策定するにあたり、地域の主役である地域住民の方々の意見を十分に活かすことを目的に、市内28地区で開催しました。座談会に



和気あいあいと(笑)

一般的に会議によくある「発言が特定の参加者に偏ってしまった」「参加者がただの傍観者になってしまった」「といったことをできるだけ少なくするために、少人数のグループで話し合いを行うことが座談会



改めて知る地域の良さ

は地域の様々な団体の代表や、下は中学生から上は80歳代と幅広い年代の住民が参加し、自分が住んでいるまちについてみんなで考える機会になったことや、座談会から出た意見から住民の方々に新たな取り組みが始まるなどの成果が見られたため、計画策定後も引き続き概ね小学校区を単位として市内全域で座談会を開催していくこととなったものです。座談会は、概ね40〜50人をめどに地域の社協支部、自治会関係者、民生委員・児童委員、老人クラブ、育成協、PTA等の各種団体や学生(中・高・大学)に参加していただき、概ね8〜10人を1グループとしたグループワークによる協議を2回シリーズで開催します。

座談会の開催状況については、長崎市のホームページ「福祉・健康」のサイトで見る事ができます。現在、市内41地区で座談会が実施されています。高齢者ふれあいサロンや「災害時の安否確認や避難誘導の仕組みづくり」、地域にある色々な団体が互いの情報を共有し協働につなげるための「地域情報交換会の開催」など、座談会をきっかけに、地域の事情に沿った自主的な住民活動が各地域で始まっています。今後も、座談会を開催していない地区については、順次、座談会を開催する予定ですので、協会の開催についてご協力をお願いいたします。

座談会の特徴の一つです。また、グループ内での話し合いでは、自分が日頃感じていた地域の課題やその解決の方法についてフセン紙に書き出していく手法を用いることで、参加者全員が必ず意見を出すことができ、全員で課題を共有することができるといった特徴もあります。



しかし、解決すべき課題もある

皆さんは「要約筆記」という言葉を知っていますか? とはあります。簡単な言葉で、聴覚に何らかの障がいを持つ方に対して、会話や言葉の内容を、要約して紙などに書いて伝えるものです。聴覚障がい者へのコミュニケーションの手段としては、一般的に手話や、表現する手法が色々あり、覚えるには時間が必要ですが、その点、要約筆記は文字を書いて相手に伝えるので、すぐに理解することが出来ます。今回ご紹介する相良満枝さんは、そんな要約筆記のボランティアを、10年以上もしていらつしやいます。相良さんが要約筆記を知るきっかけは、今から20年以上前に遡ります。当時、神戸に住んでいた相良さんは、ある講演会で講演中にずっと会場のステージの端の方で、手書きで講演の内容を書いて、スクリーンに投影している人たちがいることに興味を持たれたそうです。今思えば、それが要約筆記だったのかと要約筆記との出会いを振り返る相良さんですが、その当時は自分で図書館などで要約筆記について調べたそうです。しかし、当時のボランティア活動をされていた相良さんは、それ以上要約筆記に関わることなく年月は過ぎていき、やがてご主人の転勤を機に、生まれ育った長崎市に帰ってくる事になりました。長崎に帰ってからはしばらくして、ふと新聞の小さな記事が目にとまりました。それは、要約筆記のボランティアを募集する記事で、その記事を見た相良さんは、以前、調べたことを思い出し、「やってみよう!」と思いいち、それ以降、要約筆記の活動をする事となりました。相良さんが活動を始めた当初は、まだ要約筆記という言葉も普及しておらず、メンバーも少なかつたのですが、「長崎要約筆記サークル なごみ」というボランティアの甲斐もあり、現在、登録メンバー

皆さんは「要約筆記」という言葉を知っていますか? とはあります。簡単な言葉で、聴覚に何らかの障がいを持つ方に対して、会話や言葉の内容を、要約して紙などに書いて伝えるものです。聴覚障がい者へのコミュニケーションの手段としては、一般的に手話や、表現する手法が色々あり、覚えるには時間が必要ですが、その点、要約筆記は文字を書いて相手に伝えるので、すぐに理解することが出来ます。今回ご紹介する相良満枝さんは、そんな要約筆記のボランティアを、10年以上もしていらつしやいます。相良さんが要約筆記を知るきっかけは、今から20年以上前に遡ります。当時、神戸に住んでいた相良さんは、ある講演会で講演中にずっと会場のステージの端の方で、手書きで講演の内容を書いて、スクリーンに投影している人たちがいることに興味を持たれたそうです。今思えば、それが要約筆記だったのかと要約筆記との出会いを振り返る相良さんですが、その当時は自分で図書館などで要約筆記について調べたそうです。しかし、当時のボランティア活動をされていた相良さんは、それ以上要約筆記に関わることなく年月は過ぎていき、やがてご主人の転勤を機に、生まれ育った長崎市に帰ってくる事になりました。長崎に帰ってからはしばらくして、ふと新聞の小さな記事が目にとまりました。それは、要約筆記のボランティアを募集する記事で、その記事を見た相良さんは、以前、調べたことを思い出し、「やってみよう!」と思いいち、それ以降、要約筆記の活動をする事となりました。相良さんが活動を始めた当初は、まだ要約筆記という言葉も普及しておらず、メンバーも少なかつたのですが、「長崎要約筆記サークル なごみ」というボランティアの甲斐もあり、現在、登録メンバー



相良満枝さん 梁川町

あのへー!とんな人!とんな人!

講演会などでは、講演の内容を要約して書いたものを、スクリーンに投影します。



通常、話すスピードは1分間に、だいたい300〜350文字ぐらいですが、書くスピードは60文字ぐらいなので、要約する必要があります。

# 椎の木町第三自治会 きずな隊



「きずな隊」メンバーの皆さま

長崎市北大浦地区に位置する椎の木町第三自治会（世帯数157世帯・379人）は、長崎港を下るす風光明媚な坂と石段の多い傾斜地にあります。

この地域は住民の出入りが少なく昔から住んでいる住民が多い地域であり、現在高齢者の方々が183人、うち一人暮らし高齢者が43人（高齢化率48%）と、年々高齢化が進んでいます。

このような状況の中、これまで自治会では地域で暮らす高齢者の、見守りや日々の生活をどのように支援していくかという大きな課題に直面してきました。そこで、高齢者の方々に住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らしていただけるよう、住民同士で支え合っていくという熱い思いから、現在の「きずな隊」の代表である柴田勝義さんが自治会の役員会で「きずな隊」の結成を提案し、地域の皆さんに協力を呼びかけ、思いに賛同した数名の方々を中心に、平成25年4月に「きずな隊」が結成されました。

「きずな隊」は現在7人（民生委員・児童委員、一般の有志）で構

成されており、土曜・日曜を中心に活動をされています。

主な活動内容は、高齢者の生活全般に関する事で、現在買い物・電球の取替え・灯油の出し入れ・草むしりなどの支援活動をされています。

また、「きずな隊」のメンバーが活動を行う上で最も大切にしていることは、日頃からの声かけや見守り活動とのこと。代表者の柴田さんご自身も、朝・夕1日2回の見守りパトロールを行い、高齢者の日々の生活の変化を見逃さないことを心がけているそうで、パトロール中に何か変化があった場合は、地区の民生委員・児童委員の方に連絡し、迅速な対応をとっているそうです。

「きずな隊」があるから助かる」、「困った時に助けてくれる」、「心強い存在です」などの声が寄せられています。これからの「きずな隊」の活動を通じて、地域の中に助け合いの輪が広がり、子どもからお年寄りまで、地域に暮らす住民が安心して心豊かに暮らすことができるまちづくりが続いていくことを願っています。

## 大変な作業も皆さん笑顔で頑張っておられます！



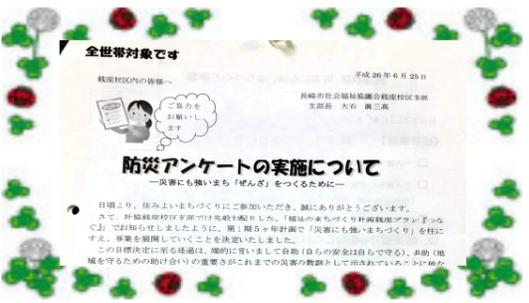
階段の雑草除去作業風景



自助あつての共助！

## 防災講演会

各自治会の協力を得て、銭座校区内に暮らす住民の防災意識や防災上の課題などの把握を目的にしたアンケートを実施。調査結果からは、住民の3人に1人が地域の避難所を知らないということや、「自分が住んでいる地域がどんな災害に弱いのか分からない」といった不安を抱えている住民が多いことが分かりました。今回のアンケート



## 防災アンケート

結果は、今後の災害にも強いまちづくり事業に役立てられる予定です。

## 防災マップづくり

現在、自治会単位で地域の危険箇所を確認する防災マップづくりが着々と進められています。これまでに、岩川町、目覚町、緑町、銭座町、上銭座町、幸町、宝町で完了し、今後、天神町でも実施される予定です。



危険箇所を確認

社協銭座校区支部主催で、11月23日（日）、銭座地区コミュニティセンターにて、「防災講演会」が開催されました。第1回目となる今回は、NPO法人ぼうぼうネットの山崎隆弘事務局長による防災講話の他、地域の地図を用いた災害図上訓練（DIG）が行われました。助け合いの仕組みづくり（共助）と共に、まずは自らの命を守る「自助」について、参加者全員で考える機会となりました。

# 災害に強いまちづくりをすすめて

社協支部結成3年目を迎えた社協銭座校区支部では、住民座談会の開催を経て、今年4月に「福祉のまちづくり計画（銭座プラン「つなぐ」）」を策定し、一年目となる活動がスタートしています。計画の愛称にもなっている「つなぐ」という言葉に現れているように、住民同士のつながりを強めることを目標に、第一期目となる今回の計画では、子どもから高齢者まで

全ての住民の生命に関わる防災をテーマに活動がスタートしています。



迫力満天の演奏

10月25日（土）、横尾小学校において横尾連合自治会主催・社協横尾支部他共催による「第二九回横尾まつり」が開催されました。この「横尾まつり」は、横尾地区とその周辺の子どものから高齢者が、心ゆくまで楽しい一日を過ごす、ふれあいと親睦を深めるとともに、地域の連帯づくりと子どもたちの思い出豊かなふるさとづくりを目的として、昭和58年から続いている一大イベントです。当日は、まつりが始まる前までは小雨や雷が鳴るなど、ぐずついた



祝 横尾まつり

お天気でしたが、開会式が始まるとお日様が顔をだし、青空が広がりました。まつりは、銀屋町鯨太鼓で幕をあけ、子ども神輿・民謡・フラダンス・中学生によるガラスバンド演奏など多くの出し物が披露された他、カレーライスの焼きそば、やきとりなどの出店や、射的・ヨーヨー釣り・スパーボールすくいといった遊びのコーナーなど、地域のみなさんや介護施設の職員さんたちの協力により、たくさんの方の催しが行われました。今回のまつりには、子どもからお年寄りまで、約3000人の地域のみなさんが参加されたそうです。横尾地区では、この「横尾まつり」以外にも、子どもレクリエーション大会や、もちつきマラソン大会、ゲートボール大会やグラウンドゴルフ大会など、子どもから高齢者まで、様々な年代の住民が参加できる多彩な行事を年間を通じて実施することで、地域全体で「顔の見える関係づくり」を実践されています。



# 第二九回横尾まつり